第2回 移動等円滑化評価会議北陸信越分科会（富山県富山市）

国土交通省

日　時：　令和２年７月２１日（火）　１３：３０　～　１６：００
場　所：　タワー１１１　スカイホール（富山県富山市）
議　題：　（１）障害のある人の身体特性からみたトイレのあり方について
（２）富山駅におけるバリアフリー施設整備について
（３）移動等円滑化促進方針の策定について
・富山県射水市バリアフリーマスタープランについて
（４）バリアフリー施策の取組み状況等について
・旅客施設等のバリアフリー化の現状について
・バリアフリー教室等の取組みについて
・公共交通事業者等のハード・ソフト取組計画について
（５）バリアフリー法の改正について
（６）その他

委　員：

ＮＰＯ法人まちづくり学校理事	中村美香	新潟県立大学名誉教授	島崎敬子
社会福祉法人新潟県社会福祉協議会地域福祉課長	中原敦子	長野工業高等専門学校電子情報工学科教授	藤澤義範
富山大学都市デザイン学部都市・交通デザイン学科准教授	猪井博登	富山国際学園富山短期大学幼児教育学科講師	明柴聰史
ＮＰＯ法人スペースＢｅ理事長	山嵜勉	ＮＰＯ法人ヒューマンネットながの理事	川崎昭仁
（一社）富山県手をつなぐ育成会理事	細川瑞子	石川県リハビリテーションセンター主幹	寺田佳世
社会福祉法人石川県視覚障害者協会理事長	米島芳文	（一社）新潟県聴覚障害者協会会長	石川渉
新潟県精神障害者団体連合会代表代理	本田美恵子	（一財）新潟県老人クラブ連合会会長	光村利寛

ＮＰＯ法人Ｄ－ＳＨｉＰＳ３２理事長〔日本電気株式会社東京オリンピック・パラリンピック推進本部障がい攻略エキスパート〕　上原大祐

東日本旅客鉄道株式会社新潟支社総務部企画室室長　西日本旅客鉄道株式会社金沢支社地域共生室企画課課長　北陸信越鉄道協会専務理事
北陸信越旅客船協会常務理事　北陸信越バス協会専務理事　北陸信越地区タクシー協議会専務理事
新潟空港ビルディング株式会社常務取締役総務部長

新潟県交通政策局交通政策課長　長野県企画振興部交通政策課長
富山県観光・交通振興局総合交通政策室次長兼地域交通・新幹線政策課長　石川県企画振興部新幹線・交通対策監室交通政策課長
新潟市都市政策部都市交通政策課長
北陸地方整備局企画部広域計画課長　北陸信越運輸局交通政策部消費者行政・情報課長

第2回 移動等円滑化評価会議北陸信越分科会（富山県富山市）

国土交通省

【発言要旨】

- 現状、多目的トイレの中は広いが、たとえば身体障害の肢体不自由の方々が便器に座ろうと思ったときに、オストメイトや洗面台が車いすを邪魔してしまって移れないとか、様々な障害が生じている。多目的トイレが当たり前の時代に、障害のある方々の身体特性をどう押さえていくのかの検討が必要である。
- 視覚に障害のある人の中には、一般トイレが大型化、多機能化、複雑化したことで非常に利用が困難になり、多目的トイレを利用することが合理的な場合があり、多目的トイレの機能として、視覚に障害のある方の利用が円滑にできる取組をしていただいている。
- 多目的トイレ内の便座横に音声案内装置の設置することにより、視覚障害の方が便座にまっすぐ移動し、円滑に利用できるようになる。
- 多目的トイレを利用する方が多くなっていることから、あらためて視覚障害者が一般トイレを利用できるよう考えていくことも課題かと思う。一般トイレ内に音声案内装置を設置することや、清掃の上で課題はあるが点字ブロックを設置することも検討いただきたい。
- 多機能トイレによって緊急ボタンがついていないところがある。何か起こったときの緊急ボタンは必要である。トイレによって差があるので、きちんと設置してほしい。
- 多目的トイレについて、最初は本当に車いすの方のみだったが、最近はどなたでもということで視覚障害の方、怪我をされている方、お子様連れなど様々な方が利用される場合があり、利用頻度が増えてきて、そこしか利用できない方の利用しにくいことにもつながっている。多目的トイレの数自体が増えたらいいと思う。
- それぞれ施設で継続的にスパイラルアップの取組をされていることは素晴らしいと思うが、一度街全体で見直すためにも計画（マスタープラン）は必要だと思う。
- 精神の方、身体的疾患のない、精神、心の世界の中の方々が救われる施設であれば、環境整備において私ども快く、多目的施設ということに関して（多機能トイレ）は、わざわざそれを使ったりして、利用させていただくことは気持ちのいいものですから、身体的欠陥の障害だけじゃなく感謝している。
- 今まで周りの方が、困ってる方に声かけてくださるっていうことが知的障害の、特に一人で乗ってる人にはとてもありがたいんですけれども、Ｗｉｔｈコロナの時代に社会の安心と心のゆとりというんでしょうかね、お互いに思いやる気持ちをどうしていけばいいのか。
- Ｗｉｔｈコロナということで、目の不自由な方とお話をしますと、一人で外出する機会が、今の段階ではかなり自粛されている。今までと同じように、声をかけていただけるんだろうか、以前のようになるだろうかと不安を持ちながら日々暮らしている人が多い。
- コロナ対応でやっぱり体に接触したりっていうのは、街を歩くときにも気軽にものを落としてしまったときに、「ごめんなさい」という声がなかなか出づらくなってしまったというのはある。
- Ｗｉｔｈコロナの話、目の不自由なお客様にお声がけやご案内するときに、腕あるいは肩をお貸しするというのを、なかなかその声をかけづらいとか、あるいは本当に自分たちの体を差し出して相手の方はどう思ってらっしゃるのだろうかというようなことが社員から声があった。
- 今まで通り声をかけていただきたいと思いますし、今まで通り基本の姿勢で誘導していただければと。私ども目の不自由なものにとっても発熱や風邪症状がない健康な状態であることの確認をしながら見える方に誘導していただいており、ＪＲの職員の皆様も日々健康チェックをなさっていると思いますので、安心して誘導できますよという、そういう姿勢で臨んでいただければ大変うれしい。
- 年齢に応じた、寄り添った、年齢ごとのバリアフリー教室を行うことによって、理解や認識をより高めていくことが今後の課題である。
- バスやタクシーの運転手さんにも手話を知っていただいて、たとえば会ったときに「こんにちは」っていうふうに挨拶が交わせたらいいなと思う。
- ベビーシートでなくてユニバーサルベッドの必要性をもっと訴える必要があるかなと思う。